「ケータイ・コミュニケーション」の逆機能に関わる要因の調査研究

Factors Linking to the Dysfunctional Aspects of Cellular Phone Communication

石川　勝博 ISHIKAWA, Masahiro

● 常磐大学
Tokiwa University

Keywords 「ケータイ・コミュニケーション」，番通選択，ケータイへの愛着，不確実性回避傾向
"Cellular phone communication," *Bantsu sentaku* (selective answering to telephone calls by using the number display service), affinity to cellular phone, uncertainty avoidance

ABSTRACT

The purpose of this study is to investigate factors related to dysfunctional aspects of cellular phone communication (1) passive interpersonal relationships, (2) restraints, (3) anxiety towards information, (4) escape, (5) lower abilities in verbal expression, and (6) annoyance. In this study I focused on the following factors: *Bantsu sentaku* (that is, selective answering to telephone calls by using the number display service), affinity to cellular phones, and uncertainty avoidance. A survey was conducted to clarify the relationship between the factors by a questionnaire method during January and February 2004. The subjects were 517 Japanese university students from Ibaraki prefecture. The total of valid responses was 502. Through multiple regression analysis, the following relationships were found. Bantsu sentaku was linked positively to (3) anxiety towards information and (2) restraints. Affinity to cellular phones was linked positively to (2) restraints, 5) lower abilities in verbal expression, (4) escape and (6) annoyance . Uncertainty avoidance was linked positively to (6) annoyance, (1) passive interpersonal relationships, and negatively to (2) restraints. This study concludes that further research on cellular phone communication literacy education is necessary.

はじめに

携帯電話の登場によって，若者の生活は変容したとされ，その影響力に関する議論は百花繚乱の観がある．新たなメディアが生まれると，そのメディアがもたらすマイナスの側面が強調されることが多いが（Palmgreen, 1984 ; Neuman, 1991），メディアには功罪あると考えるのが自然であろう．携帯電話については，利用者の視点からはプラスの側面が，観察者の視点からはマイナスの側面が指摘されることが多い．しかしながら，利用者は，効用だけでなく何らかの不都合も感じつつ携帯電話を用いていると考えられる．そこで，石川（2004）は，質問紙調査によって，携帯電話を用いたコミュニケーションに感じる不都合としての逆機能の６つの側面を提示した．

携帯電話を有効利用する，いわばリテラシーを身につける方法には，そのプラスの側面を伸ばしていく方法と，マイナスの側面を軽減していく方法が考えられよう．本研究は，携帯電話を用いたコミュニケーションを改善する第一歩として，マイナスの側面に関わる要因を明らかにすることを目的とする．

以下，携帯電話を用いたコミュニケーションに関わる要因として，選択的対人関係の促進要因になるとされる「番通選択」，携帯電話が常に手放せない「愛着」，そして，日本人のコミュニケーションの特色の１つである「不確実性回避傾向」の３つの要因と，携帯電話を用いたコミュニケーションの６つの逆機能との関係を，質問紙調査によって明らかにする．

1　研究の背景

現在の携帯電話は単なる電話ではない．例えば，メールの送受信機，インターネット端末，時計，計算機，カメラ，テレビ電話，ヘッドフォン・ステレオとして使える．各種イベントのチケット予約，クレジット決済に用いることもできる．近年では，GPS機能が搭載されたものや，地上デジタル放送の受信機としても使えるものもある．

こうした携帯電話の多機能化を鑑みて，『ケータイ学入門』（岡田と松田, 2002）では，携帯電話を「ケータイ」と表記している．それは，「日常会話では，ケータイと呼ばれることが多く，また今日の携帯電話が時計やアドレス帳，電子メール交換やインターネット接続などの機能を兼ね備え，もはや『電話』としての機能を越えたメディアとなっている」（p. 1）からである．そこで，本研究は彼らに倣い，多種多様な機能を備えたモバイル機器としての携帯電話を「ケータイ」，携帯電話を用いたコミュニケーションを「ケータイ・コミュニケーション」と表記する．

1.1　ケータイ・コミュニケーションの逆機能

多くの若者がケータイを所持している現在，彼らの生活においてケータイが果たす役割について議論されている．その立場としては，効用を示す肯定派と，悪影響を強調する否定派がある．前者はケータイ利用者のことばに基づく調査結果であり，後者はあまり利用しない観察者の意見であることが多い．

しかしながら，ケータイ利用者は，その効用を享受するとともに，何らかの不都合も感じと思われる節がある．そこで，石川（2004）は，質問紙調査によって，ケータイ・コミュニケーションの逆機能を明らかにすることを試みた．

この研究では，分析枠組みとして，マス・コミュニケーションの機能分析（Wright, 1964）を用いることにした．マス・コミュニケーションの機能とは，マス・コミュニケーションの活動（環境監視，社会調整，文化の伝承，娯楽）が，社会，個人，集団，文化にもたらす客観的・寄与的な結果を，逆機能とは，客観的・非寄与的な結果（Wright, 1964 ; 竹内, 1967）を意味する．ケータイ・コミュニケーションが受け手にもたらす不都合は，個人にもたらす非寄与的結果と考えられるので，逆機能と捉えられる．

社会学においては，観察者の視点による理論的

検討から，逆機能の分析が行われるが，マス・コミュニケーション研究においては，調査から得られた受け手自身の言葉に基づいて逆機能を分析する場合がある．例えば，「利用と満足」研究が機能分析と捉えられる場合もある（竹内，1967）．また，海後（1999）は，質問紙調査によって，テレビ報道の機能分析を行い，顕在的順機能，潜在的順機能，潜在的逆機能，潜在的没機能を明らかにしている．したがって，質問紙調査によってもケータイ・コミュニケーションにおける逆機能を捉えられると考えられる．

ケータイ・コミュニケーションの逆機能の類型を示すため，石川（2004）は2度の質問紙調査を実施した．茨城県内の文系大学生131名を対象にした第1次調査では，ケータイを用いる際に感じる不都合について自由記述させ，第2次調査で用いる質問項目の作成を行った．その結果，36項目が得られた．第2次調査は，茨城県内の文系大学生262名を対象に実施された．36項目について5段階尺度で質問し，その結果を因子分析したところ，1）「受動的対人関係」，2）「束縛」，3）「情報不安」，4）「逃避」，5）「言語表現力の低下」，6）「煩わしさ」の6つの逆機能が析出された．

1）「受動的対人関係」とは，限られた関係のなかで，自分からは積極的に動かずに，他者に合わせる表面的な対人関係を指している．2）「束縛」とは，ケータイにいつ連絡が入るかと常に気が休まらない，他者から連絡がないと寂しいといったかたちで，ケータイに縛られることを指している．3）「情報不安」とは，ケータイからの個人情報の漏洩や，ケータイから入る不確かな情報への不安である．4）「逃避」とは，現実から逃避するために，ケータイを使って時間を無駄に過ごすことを指している．5）「言語表現力の低下」とは，過度に省略した表現や，メールで文章を作る際の「絵文字」の使用により，自らの文章作成の力，語彙力が落ちているとの実感を意味する．6）「煩わしさ」とは，他者のマナー違反への不快感，時と場所をわきまえない連絡に対応せざるを得ないことに感じる負担である．さらに，析出された6類型と，Wright（1964）によるマス・コミュニケーションの活動の結果としての逆機能との対応を検討した．その結果，環境監視と情報不安が，社会調整と受動的対人関係が，文化の伝承と言語表現力の低下が，娯楽と逃避が照応すると捉えられた．束縛，煩わしさについては，社会調整の逆機能とは対応しないが，対人関係に関わる逆機能であると捉えられる．

以上，ケータイ・コミュニケーションの逆機能の6つの類型を紹介した．今後は，これらを低減，あるいは改善する手だてを探る必要があるだろう．その第一歩として，本研究では，これらの逆機能に関連する要因を探ることにしたい．

1.2 番通選択

本研究では，ケータイ・コミュニケーションの逆機能に関わる第1の要因として，「番通選択」を取り上げる．「番通」とは番号通知の略であり，発信者の電話番号が受信者に通知されることである．番号通知機能は，ケータイのほぼ全ての機種に装備されており，受信者は相手を確認した上で，応答するかどうかを決められる．この機能によって，気心の知れた相手には応対し，話したくない相手には応答せずに済ますこともできる．このように，応答時に相手を選ぶことが「番通選択」である（岡田ら，2000；松田，2000；松田ら，2002）．以上は通話の例であるが，メールのやりとりにおいても，相手のアドレスが表示されるので，応答の選択は可能である．よって本研究では，番通選択を通話とメールの利用における応答の選択と捉える．

ケータイ・コミュニケーションにおける番通選択は，相手を選んでの対人関係，すなわち「選択的対人関係」を助長する可能性がある．番通選択経験者は経験のない者と比較すると，対人関係がより選択的であるという調査結果もある（松田ら，2002）．相手を選んでの対人関係は，対人関係の希薄化と同義に捉えられ，否定的に扱われる場合が多いと指摘されている（松田，2000；松田ら，2002）．

橋元（1998）や辻（1999）は，若者の生活に関する調査結果をレビューしている．こうした調査では，若者が「友人・親友の数」として挙げる数は，近年，増加しており，「心を打ち明けられる友人はいない」といった設問への回答者の割合は減少しているとする．したがって若者の対人関係が希薄化しているとの証拠は見出されていないと主張している．

これを受けて松田（2000）は，若者は，ケータイを使って誰とでも話すのではなく，好きな相手や気の合う相手と話しているが，これを対人関係の希薄化と捉えるべきではないとしている．「選択的」対人関係が，希薄化，すなわち「部分的で浅い」と見えるのは，「広い－狭い」，「深い－浅い」という軸で捉えるためであり，あえて「浅い－深い」を使って表現するならば，「部分的でかつ深い」関係であるとしている．

松田（2000）は，番通選択によって対人関係が選択的になっているとしても，希薄化しているとは言えないとする．さらに，選択的対人関係の促進は，ケータイよりも，都市化による「接触可能な人の増大」が原因ではないかとも推測している．確かに，ケータイがもつ技術的特色の１つにすぎない番通機能が，若者のコミュニケーションのあり方まで規定するとは考えがたい．

こうして見ると，ケータイ・コミュニケーションの円滑化のために，番通機能は有効に利用されているようであり，ケータイ・コミュニケーションにおける選択的対人関係を全否定するのは問題がある．しかしながら，無批判に受け入れてよいのであろうか．相手を選ぶことによる何らかの不都合はないのであろうか，という疑問が残る．そこで，番通選択とケータイ・コミュニケーションの逆機能との関係を探ることにしたい．

1.3 ケータイへの愛着

ケータイをめぐる問題としてしばしば取り上げられるのは，ケータイが常に手放せなくなることである．これは，「中毒（addiction）」，「依存（dependency）」，「愛着（affinity　あるいは，attachment）」などと表現される．

朝，起床すると友人からのメールが入っており，日中も不定期に連絡が入り，深夜になってもメールが送られてくるため，気が休まらないという話はよく耳にする．こうしたコミュニケーションに負担を感じるのであれば，ケータイの電源を切ればよい．しかし，これはなかなかできない．なぜならば，相手からの連絡に即時フィードバックしないと，拒絶やメッセージの否定と受け取られかねないからである．こうして，ますますケータイなしでは過ごせなくなってしまう．

本研究では，メディアへの中毒，依存，愛着のうち，愛着を取り上げる．メディアに対する愛着に関する研究でも，特にテレビへの愛着に関する研究例が多いので（Greengerg, 1974；Rubin, 1984など），これをケータイに応用することにする．これらの研究で言うところのテレビへの愛着とは，日常生活における必需品として感じる度合いであり，テレビ自体あるいは番組内容が重要と感じる態度を意味する．

テレビへの愛着は，「利用と満足」研究でもしばしば検討され，様々な変数との関連が明らかにされてきた．例えば，Rubin（1984）の研究では，教育程度との間には負の相関が，年齢との間には正の相関があることが示されている．また，RubinとPerse（1987a）の研究では，テレビ視聴における意図性と，高い正の相関が見られた．RubinとPerse（1987b）の研究では，ソープ・オペラ番組に愛着を感じている者は、その内容に現実味があると感じ、意図的に集中して番組を視聴することが見出された．メディアに愛着があるものは，確たる意図もなく習慣的にメディア接触をするとのイメージがあるが，RubinとPerse（1987a；1987b）の研究結果は，こうした見解が必ずしも正しくはないことを示している．

一般的には，ケータイへの愛着が強い者は，とるに足らない目的のために利用しているとの認識があるのではなかろうか．しかし，この結

果を受ければ，ケータイに愛着が強い者が意図的に活用している可能性が示唆され，愛着自体を悪しきことと捉えるには疑問が残ると考えられる．しかしながら，常にケータイが手放せないことで，何らかの不都合も感じるのではなかろうか．そこで，本研究では，ケータイへの愛着とケータイ・コミュニケーションの逆機能との関係も明らかにしたい．

1.4 不確実性回避傾向

1.2の番通選択の項で述べたように，ケータイ・コミュニケーションでは，電話にでたりメールを読む前に相手が確認できる．よって，どのように対処すればよいのか，あらかじめ予測できる．ドメイン設定をすれば，一定のメールの受信拒否ができ，不快なメールをある程度は受け取らずにすむ．こうした意味では，ケータイはより確実なコミュニケーションが図れるメディアと言えるかもしれない．

その反面，スパムメールが入るおそれや，興味本位にサイトへと入っていくと架空料金請求を受けるなどのトラブルに巻き込まれる危険性もある．ケータイは，不確実なコミュニケーションをもたらすメディアであるとも言える．

このように考えると，「ケータイが，確実，不確実のどちらのコミュニケーションをもたらすか」と考えるのは得策ではない．実際，ケータイを通じて，気のおけない相手とのみコミュニケーションする人がいる．その一方，見知らぬ相手とも活発にやりとりする人もいる．ケータイ・コミュニケーションが確実なものか否かは，ケータイというメディアが持つ特性よりも，受け手の特性で規定されると思われる．

そこで本研究では，異文化コミュニケーション論で研究されている「不確実性回避理論(uncertainty avoidance theory)」を参考にする．この理論は，「人間は不確実性の高い状況を避ける」という考え方に基づいている．Hofstede (1980)は，ある文化の成員が不確実な状況や未知の状況に対して脅威を感じると，それを避けようとする傾向があると述べている．これが「不確実性回避傾向」である．不確実な状況とは，相手の考え方や行動の仕方が分からなかったり，相手に関する情報が欠如していたり，相手と自分との関係がはっきりしない場合などが挙げられる．人間はこうした状況に不安を感じるので，なるべく避けるようにするという．なお，文化や個人によって，不確実性を感じる程度は異なるが，日本人は，往々にしてその度合いが高いという (Hofstede, 1980)．

不確実性回避傾向は，ケータイ・コミュニケーションにどのような影響を及ぼすであろうか．例えば，不確実な状況を避けることによってトラブルを回避することが考えられよう．その一方，必要以上に警戒することで，ケータイの効用を充分に生かせず不都合を感じることもあるのではなかろうか．そこで，本研究では，不確実性回避傾向とケータイ・コミュニケーションの逆機能との関連も探ることにしたい．

以上述べたように，本研究では，選択的対人関係を促進しうる「番通選択」，ケータイが常に手放せない「ケータイへの愛着」，そして「不確実性回避傾向」のそれぞれが，ケータイ・コミュニケーションの逆機能と，どのような関連があるのかを明らかにする．

2 調　査

2.1 調査の目的

番通選択，ケータイへの愛着，不確実性回避傾向それぞれと，ケータイ・コミュニケーションの6つの逆機能との関連を明らかにすることを目的とする．そのために，茨城県内の国立A大学，私立B大学の学生517名を対象に，2004年1月中旬から2月初旬にかけて，質問紙調査を実施した．授業時間内に質問紙を配布して，一斉に回答させた．

2.2 分析対象者の内訳

517名のうち，回答漏れがあるなどした15名を除く502名を分析対象とした．その内訳は表1に示すとおりである．男女のバランスは比較的と

れているが，学年については偏りが見られ１，２年生が多い．分析対象者の平均年齢は，19.65才である．

表１　分析対象者の内訳

	1年	2年	3年	4年	無回答	合計
男	94	90	41	14	1	240
女	158	65	35	3	0	261
無回答	0	0	0	0	1	1
合計	252	155	76	17	2	502

2.3 調査内容

今回の質問紙調査の内容は，次のとおりである．

2.3.1 被調査者の属性

大学名，学科名，学年，性別，年齢について質問した．

2.3.2 通話とメールの送受信回数

１日当たりの，おおよその通話回数とメールの送受信回数を回答させた．それぞれについて「０～４回，５～９回，10～14回，15～19回，20回以上」の選択肢から，１つを選ばせた．

2.3.3 ケータイ・コミュニケーションの逆機能

ケータイ・コミュニケーションの６つの逆機能に関する質問をした．石川（2004）の研究では36項目を用いたが，本研究では他にも質問項目があることから，被調査者の回答上の負担を軽減するため，項目数を減らすことにした．そこで，最も項目数が少なかった第６因子（３項目）に項目数を揃え，各因子より負荷量の高い順に３項目ずつ，計18項目を採用した（表２）．調査票での配列は，解釈を超えてランダム化された．

表２　ケータイ・コミュニケーションの逆機能の質問項目

受動的対人関係
1. 対人関係が狭くなったと感じる
2. 人とのつきあいが表面的になった
3. 皆の意見に合わせるようになった
束縛
4. 返事がもらえないと、不安になる
5. 連絡が来ないと寂しい
6. いつ連絡が来るかと、気が休まらなくなった
情報不安
7. 個人情報が漏れるかと心配になる
8. 知らないうちに被害を受けないかと心配だ
9. ケータイで知った間違った情報を信じてしまった
逃避
10. 自分をコントロールできなくなった
11. 時間を無駄にすごすようになった
12. 嫌なことがあると、ケータイに逃げてしまう
言語表現力の低下
13. 辞書を引かなくなった
14. 正しい日本語ではない表現を使うようになった
15. 漢字が書けなくなった
煩わしさ
16. 他の人のマナー違反が不快に感じた
17. 都合が悪いときに連絡がきて、面倒くさい
18. 返事するのが負担に感じた

2.3.3 番通選択，ケータイへの愛着，不確実性回避傾向

番通選択の測定は，岡田ら（2000）の研究と松田（2000）の研究を参考に作成した３項目で行った（表３）．ケータイへの愛着の質問項目は，Rubin（1981）とRubinとRubin（1982）によるテレビへの愛着尺度をケータイに応用して作成した（表４）．不確実性回避傾向は，Hofstede（1980）の研究に基づいて作成した９項目で測定した（表５）．

表３　番通選択の質問項目

1　ケータイは，相手の名前が通知されるので安心だ
2　知らない相手からの電話だと，出なかったことがある
3　知らない人からのメールは，読まないことがある

表4　ケータイへの愛着の質問項目

1	他に何もすることがないと，ケータイを手にしてしまう
2	ケータイなしで数日過ごすのは不安だ
3	ケータイが壊れてしまったら，やっていけないと思う
4	ケータイの使用は，私の生活のなかで最も大切なことの1つだ
5	ケータイがないと，困り果ててしまう

表5　不確実性回避傾向の質問項目（*は逆転項目）

1	人生は，理屈で割り切れないからこそ面白いと思う*
2	この先どうなるか分からない状況に，むしろワクワクする*
3	環境が変わると，ストレスを感じやすい方だ
4	初対面の人と話すときには，相手がどんな人か気になる
5	自分と違う経験を持つ人とコミュニケーションするのは怖い
6	人と話すときには，自分が相手よりも年上か年下かを気にする方だ
7	初対面の人とは，あたりさわりのない会話をしてしまう
8	集団のルールを守れない人は許せない
9	自分の考えを理解してくれない人と話すのは苦手だ

3 分　析

3.1 通話回数とメールの送受信回数

分析対象者の一日当たりの通話回数，並びにメールの送受信回数の回答をクロスした結果を表6に示す．通話回数に関しては偏りが見られ，「0～4回」が446名と9割近くを占めている．その一方，メールの送受信回数に関してはばらつきが見られる．「5～9回」が173名と最も多く，次いで「20回以上」が102名，「10～14回」が95名となっている．通話回数がメール回数を上回る組み合わせの回答をした者はほとんどいない．（3名）通話回数が「0～4回」でかつ，メール回数が「5～9回」という組み合わせが最も多く，全体の1／3近い161名となっている．こうしてみると，今回の調査対象の大学生のケータイ利用は，メールの送受信が多いと捉えられる．これは，中村（2001a）のケータイメールの利用頻度は，通話利用よりも多いとの調査結果とも一致する．

大学生のケータイ利用がメールの送受信に偏っているのは，メールの方が，通話よりも料金が安く済むことに加え，通話ほど相手の都合を考慮せずに，手軽に送ることができる点にもあると思われる．

表6　分析対象者の1日当たりのケータイ通話回数とメール送受信回数のクロス集計表

		メール送受信回数						
		0~4回	5~9回	10~14回	15~19回	20回以上	無回答	合計
通話回数	0~4回	84	161	82	29	89	1	446
	5~9回	1	12	10	14	12	0	49
	10~14回	1	0	2	0	1	0	4
	15~19回	0	0	1	1	0	0	2
	20回以上	0	0	0	0	0	0	0
	無回答	0	0	0	1	0	0	1
	合計	86	173	95	45	102	1	502

3.2 各変数の記述統計結果

先ず，ケータイ・コミュニケーションの逆機能，それぞれの得点平均と標準偏差を表7に示す．それぞれの質問は5段階尺度で回答させたため，最低点は3点，最高点は15点となる．

表7　各逆機能と得点平均と標準偏差

	受動的対人関係	束縛	情報不安	逃避	言語表現力の低下	煩わしさ
得点平均	6.85	9.50	8.46	6.06	8.56	10.69
標準偏差	2.33	2.58	2.74	2.45	2.92	2.39

番通選択，ケータイへの愛着，不確実性回避傾向は，いずれも5段階尺度で測定した．番通選択は，3項目からなるので最低点は3点，最高点は15点である．ケータイへの愛着は，5項目からなるので最低点は5点，最高点は25点である．不確実性回避傾向は，9項目からなるので最低点は9点，最高点は45点である．表8から10に，それぞれの得点平均と標準偏差を示す．

表8　番通選択の得点平均と標準偏差

得点平均	標準偏差
9.81	2.26

表9　ケータイへの愛着の得点平均と標準偏差

得点平均	標準偏差
15.10	4.82

表10　不確実性回避傾向の得点平均と標準偏差

得点平均	標準偏差
28.77	4.29

以下では，本研究の目的に従い，番通選択，ケータイへの愛着，そして不確実性回避傾向のそれぞれと，ケータイ・コミュニケーションの逆機能との関連を明らかにする．

3.3 番通選択とケータイ・コミュニケーションの逆機能との関連

番通選択を目的変数とし，ケータイ・コミュニケーションの6つの逆機能を説明変数として，ステップワイズ式の重回帰分析を行った．その結果を表11に示す．なお，回帰式の説明率は，R^2 =.07であり有意であった（F (2, 501) =19.04 p<.001）．

表11　番通選択とケータイ・コミュニケーションの逆機能の重回帰分析結果（ステップワイズ式）

		標準偏回帰係数	t 値
ステップ1	情報不安	.228	5.15***
ステップ2	束縛	.095	2.13*

***p<.001　*p<.05

表11に示したとおり，標準偏回帰係数が有意であった変数は，情報不安，次いで束縛であった．第1ステップでは，情報不安の標準偏回帰係数は.228であり，第2ステップでは束縛のそれが.095となっている．以上のように，番通選択は，情報不安と束縛とに正の関連が見られた．

3.4 ケータイへの愛着とケータイ・コミュニケーションの逆機能との関連

ケータイへの愛着を目的変数とし，ケータイ・コミュニケーションの6つの逆機能を説明変数として，ステップワイズ式の重回帰分析を行った．その結果を表12に示す．なお，回帰式の説明率は，R^2 =.12であり有意であった（F (4, 501) =18.50 p<.001）．

表12　ケータイへの愛着とケータイ・コミュニケーションの逆機能の重回帰分析結果（ステップワイズ式）

		標準偏回帰係数	t 値
ステップ1	束縛	.416	9.65***
ステップ2	言語表現力の低下	.144	3.43**
ステップ3	逃避	.121	2.62**
ステップ4	煩わしさ	-.094	2.42*

***p<.001　**p<.01　*p<.05

表12に示したとおり，標準偏回帰係数が有意であった変数は，選出順に，束縛，言語表現力の低下，逃避，煩わしさであった．第1ステップにおいては，束縛の標準偏回帰係数は .416であり，第2ステップでは言語表現力の低下のそれが .144，第3ステップでは逃避のそれが.121，第4ステップでは煩わしさのそれが -.094となっている．ケータイへの愛着は，束縛，言語表現力の低下，逃避とには正の関連が，煩わしさとの間には負の関連が見られた．

3.5 不確実性回避傾向とケータイ・コミュニケーションの逆機能との関連

不確実性回避傾向を目的変数とし，ケータイ・コミュニケーションの6つの逆機能を説明変数として，ステップワイズ式の重回帰分析を行った．その結果を表13に示す．なお，回帰式の説明率は，R^2 =.29であり有意であった（F (2, 501) =50.26 p<.001）．

表13　不確実性回避傾向とケータイ・コミュニケーションの逆機能の重回帰分析結果（ステップワイズ式）

		標準偏回帰係数	t 値
ステップ1	煩わしさ	.164	3.81***
ステップ2	受動的対人関係	.155	3.41**
ステップ3	束縛	.145	3.05**

***p<.001　**p<.01

表13に示したとおり，標準偏回帰係数が有意であった変数は，選出順に，煩わしさ，受動的対人関係，束縛であった．第1ステップでは，煩わしさの標準偏回帰係数は .164であり，第2ステップでは受動的対人関係のそれが .155，第3ステップでは束縛のそれが .145となっている．不確実性回避傾向は，煩わしさ，受動的対人関係，束縛，それぞれとの間に正の関連が見られた．

4 考　察

以下では，番通選択，ケータイへの愛着，不確実性回避傾向のそれぞれと，ケータイ・コミュニケーションの逆機能との関連の分析結果に

ついて考察を進める．

4.1 番通選択とケータイ・コミュニケーションの逆機能の関連

表11で示したように，番通選択と関連が見られたのは，「情報不安」と「束縛」の2つであった．番通機能を用いて相手を選ぶことと，ケータイからの情報漏れや不確かな情報流入の不安である「情報不安」との関連は，情報に関わる各種のトラブルを避けるために相手を選んだり，あるいは，相手を選ぶことでトラブルを回避しようとしていることのあらわれと解釈できる．

「束縛」との正の関連は，番通選択で選ぶ相手とのコミュニケーションにおいて，その相手からいつ連絡が入るかと気になり，連絡がないと寂しいという「束縛」を感じていることを示している．その相手とは，ケータイ上だけではなく，現実の生活においても親しい間柄にある可能性が高い．例えば，中村（2001b）は，ケータイは，よく会う人との私的連絡に，しばしば使われることを示している．また，メールの相手は，親しい人が最も多いとの調査結果もある（中村, 2003）．つまりは，番通選択により，決まった相手と「常につながっている関係」にあり，そこに束縛を感じているのではなかろうか．

番通選択による対人関係の希薄化については，本研究では証明されなかった．それは，受動的対人関係と関連が見られなかったからである．対人関係が選択的になることで，対人関係の希薄化が生じるとは言えない（松田, 2000）のかもしれない．これは，今後も検討すべき問題である．

4.2 ケータイへの愛着とケータイ・コミュニケーションの逆機能の関連

表12に示したように，ケータイへの愛着は，「束縛」，「言語表現力の低下」，「逃避」，「煩わしさ」の4つと関連が見られた．ケータイへの愛着とは，表4の項目から分かるように，ケータイが手放せず，手元にないと日常生活に支障をきたすとまで重要と感じるような，ケータイへの態度である．この内容からすれば，ケータイに縛られているように感じる「束縛」と正の関連があったのは当然であろう．

次いで，「言語表現力の低下」，くだけた日本語表現や絵文字の使用によって，言語表現力が低下したとの実感との関連を検討する．ケータイが手放せず頻繁にやりとりする者は，くだけた表現を多く用いているために，言語表現力が落ちたと感じていることである．もしくは，くだけた表現でやりとりしているうちに，ケータイが手放せなくなったということである．

ここで問題となるのは，頻繁なやりとりと，くだけた表現との関係である．それは，次のように考えられよう．例えば，メールの文字数を減らしなるべく料金を安くあげようとして，省略したくだけた表現を用いることもあるだろう（ケータイ各社には定額サービスがあるので，この点についてはあまり当てはまらないかも知れない）．

また，頻繁にやりとりする相手とは，親しい間柄にあると考えられるので，そのやりとりにおいては，型にはまった表現よりもくだけた表現，さらにはより自分の感情を豊かに表現できたり，相手の気持ちを和ませる絵文字（中村, 2001c）を多く用いているのではなかろうか．そのため，ケータイへの愛着と「言語表現力の低下」に関連が見られたと考えられる．

「逃避」，時間を無駄に使ったり，嫌なことがあるとケータイに逃げることとの関連からは，ケータイが手放せずに，さしたる目的がなく逃避に用いている受け手像が浮かんでくる．

「煩わしさ」とには，負の関連が見られた．愛着が強いと都合が悪いときの連絡やマナー違反などに煩わしさを感じていない，もしくは，煩わしさを感じていないと，愛着が強いと言える．ケータイ・コミュニケーション上の煩わしさを感じないのは，いつ連絡がこようとも返信するのがマナーと認識していると考えられる．とすれば，時をわきまえない連絡に対しても，周りの人が場をわきまえずにケータイを使っていても，それをさほど煩わしくは感じないであろう．ケータイへの愛着が強く手放せない者は，

こうした認識が強いのではなかろうか.

4.3 不確実性回避傾向とケータイ・コミュニケーションの逆機能の関連

表13に示したとおり，不確実性回避傾向は，「煩わしさ」,「受動的対人関係」,「束縛」と正の関連が見られた．不確実性回避傾向とは，コミュニケーションにおいて，相手がどういった人であるか，どう振る舞うべきかが分からないといった，不確実なコミュニケーション状況を避ける傾向である．

「煩わしさ」とは，都合の悪いときの連絡やマナー違反に煩わしさを感じることである．不確実性回避傾向が強いと，相手の人となり，その人への接し方が分かる状況において，けじめあるコミュニケーションをする傾向にあると考えられる．こうした者にとっては，時間をわきまえない連絡やマナー違反は煩わしいものでしかないであろう．

「受動的対人関係」とは，限られた関係のなかで，自分からは積極的に動かずに，他者に合わせる表面的な対人関係である．不確実性回避傾向との関連は次のように解釈できる．

先ずは，この傾向が強いと相手の情報が分かる状況を好むので，ケータイでは気心の知れた親しい相手とやりとりする傾向が強いと思われる．そのため,「対人関係が狭まった」と感じているのではなかろうか.

また，近年のケータイの普及状況からすると，さほど親しくない相手から連絡を受ける機会もあるだろう．これは不確実な状況である．不確実性回避傾向が強いと，こうした相手に自ら積極的に連絡するよりも，連絡を受ける機会が多いと考えられる．連絡をするにしても，込み入った内容のやりとりはしないであろう．そうした意味で,「対人関係が表面的になった」とも感じるのではなかろうか.

最後に,「束縛」との関連について検討する.「束縛」とは，ケータイにいつ連絡が入るかと常に気が休まらない，他者から連絡がないと寂しいといったかたちで，ケータイに縛られることを指している．不確実性回避傾向が強い者は，相手から返事がもらえない不確実な状況に不安を感じ，いつ連絡が入るかと気が休まらないのであろう.

5 まとめ

本研究では，ケータイ・コミュニケーションの逆機能に関わる要因を探るために，質問紙調査を実施した．本調査で得られた知見は，次のようにまとめることができる.

(1) 大学生のケータイ利用は，通話よりもメール利用が多い.

(2) ケータイ利用における「番通選択」と関連が見られたのは,「情報不安」と「束縛」であった．番通選択によって，個人情報の流出などのトラブルがないように対処していると考えられる．また，番通で選ぶ相手とのコミュニケーションに束縛を感じていると捉えられる.

(3) ケータイへの「愛着」と関連が見られたのは,「束縛」,「言語表現力の低下」,「逃避」,「煩わしさ」であった．ケータイが手放せないと感じている者は，ケータイに縛られていると感じ，ケータイを逃避に用い，日本語の表現能力が落ちていると感じている．さらには，時間と場所をわきまえない連絡や周囲のマナー違反に煩わしさを感じていない．こうしてみると，ケータイへの愛着は好ましいとは言えない.

(4)「不確実性回避傾向」と関連が見られたのは,「煩わしさ」,「受動的対人関係」,「束縛」であった．不確実性回避傾向が強いと，時と場所をわきまえない連絡に煩わしさを感じ，その対人関係が浅く狭いものになったと感じ，親しい相手から連絡がないと気が休まらないと感じている.

以下では，今回明らかになった，3つの変数とケータイ・コミュニケーションの逆機能との関連から，今後の課題を提示することにしたい.

番通選択は，情報流出などのトラブル回避に

用いられていると解釈できた．よって，この機能をより有効に活用していくべきである．さらに，番通で選ぶ相手に「束縛」を感じていることが示された．今後は，番通で選んだ相手とのコミュニケーションに束縛を感じることと，松田（2000）が指摘する「部分的でかつ深い」選択的対人関係とどのような関連があるのかを検討してみたい．

愛着に関しては，「束縛」，「言語表現力の低下」，「逃避」と正の関連があった．愛着が強い者が，ケータイに縛られているように感じ，日本語の表現力が落ちたと感じ，現実逃避に用いているとしたら，これは問題である．「煩わしさ」との負の関連から，愛着が強いといつ連絡が入ろうとも気にせず，周りのマナー違反にも鈍感であると考えられる．とすれば，これも問題である．今後は，ケータイへの愛着度を下げるための方策を練る必要があるだろう．

不確実性回避傾向との関連は，不確実な状況を避けるために，相手を選び，親しい間柄の人とのコミュニケーションに限定することで，対人関係が狭くなったり，その関係に束縛を感じたりすることのあらわれと解釈される．不確実な状況を避けることで，こうした現象が生じるとすれば，これは問題である．

相手の顔が見えない不確実な状況は，「フレーミング（flaming）」（Kiesler, 1985など）が生じやすいなど否定的に捉えられがちであるが，一概に悪しきものとは言えない．不確実であるがゆえに，コミュニケーションがうまくいく場合もある．例えば，相手が見えない，キューレスな状況では，面と向かっては気恥ずかしいような，感謝の気持ちを伝えられることができたりもする（中村, 2001c）．ケータイの使い方によっては，不確実な状況ならではのコミュニケーションを図ることができると言える．単に不確実な状況を避けるのではなく，有効に活用するためのケータイ利用方法も検討する必要があると考えられる．

また，今回は，番通選択と不確実性回避傾向を別の変数として扱ったが，不確実な状況を避ける方法の１つとして，番通選択を捉えることも可能である．今後は，これらの概念のさらなる精査が必要だろう．

今回の調査結果は，サンプリング方法に問題があるため，一般化するのは危険である．今後も継続的に調査を行っていく必要があるだろう．また，本研究では，携帯電話を多種多様な機能を備えたモバイル機器である「ケータイ」と捉えたため，通話機能，メール機能とに分けての分析を行わなかった．例えば，通話においては，確実なコミュニケーションを，メールにおいては不確実なコミュニケーションをする可能性も考えうる．よって，それぞれについての分析も今後は必要になると思われる．

参考文献

Cantril, H. （1940). *The Invasion from Mars : A study in the psychology of panic*. Princeton, NJ:Princeton Univ. Press.（斎藤耕二・菊池章夫訳　火星からの侵入　1971，川島書店）

Greenberg, B. S. (1974). Gratifications of television viewing and their correlates for British children. In Blumler, J. G. & Katz, E. (Eds.), *The uses of mass communications* (pp.71-92) Beverly Hills, CA: Sage.

橋元良明　（1998）．パーソナル・メディアとコミュニケーション行動．竹内郁郎・児島和人・橋元良明（編）　メディア・コミュニケーション論　北樹出版　pp.117-138.

橋元良明・石井健一・中村功・是永論・辻大介・森康俊（2000）．携帯電話を中心とする通信メディア利用に関する調査研究　東京大学社会情報研究所調査研究紀要, 14，3-192.

Hofstede, G. (1980). *Culture's consequences*. Beverly Hills, CA : Sage.（万成博・安藤文四郎訳　経営文化の国際比較　1984, 産業能率大学出版部）.

Hofstede, G. (1991). *Cultures and organizations: Software of mind*. NY:McGraw-Hill.（岩井紀子・岩井八郎訳　1995　多文化世界－違いを学び共存への道をさぐる, 有斐閣）.

石井久雄（2003）．携帯電話で結ばれた青少年の人間関係の特質　「フルタイム・インティメート・コミュニティ」概念をめぐって　子ども社会研究, 9, 42-59.

石井　敏・久米昭元・遠山淳（編）（2001）．異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて　有斐閣ブックス.

石川勝博（2004）.「ケータイ・コミュニケーション」の逆機能に関する研究　人間科学　21（2）, 39-50.
海後宗男（1999）.テレビ報道の機能分析　風間書房
カッツ, J. E.・オークス, M.（編）（2003）. 立川敬二監修・富田英典監訳　絶え間なき交信の時代　ケータイ文化の誕生　NTT出版
川浦康至・松田美佐（編）（2001）.現代のエスプリ（405）携帯電話と社会生活　至文堂
Kiesler, S., Zubrow, D., Moses, A., and Geller, V. (1985). Affect in computer mediated communication : an experiment in synchronous terminal-to-terminal discussion. *Human Computer Interaction, 1*, 77-104.
栗原正輝（2003）.若者の対人関係における携帯メールの役割　情報通信学会誌, 21（2）, 87-94
松田美佐（1999）.変容する移動体メディアとその可能性　東京大学情報メディア研究資料センターニュース第11号 http://www.snowfall. isics. u-tokyo.ac.jp/new/news11/11-2.html
松田美佐（2000）. 若者の友人関係と携帯電話利用－関係希薄化論から選択的関係論へ－　社会情報学研究, 4, 111-122
松田美佐・富田英典・岡田朋之・羽渕一代（2002）若年層における移動体通信メディア利用と対人関係の変容　電気通信普及財団研究調査報告書, 17, 209-215
Merton, R. K. (1957). *Social theory and social structure rev. ed*. Glencoe, IL: The Free Press（森東吾他訳　社会理論と社会構造　1961, みすず書房）
中村　功（1996）.携帯電話の「利用と満足」その構造と状況依存性　マス・コミュニケーション研究, 48, 146-159.
中村　功（1997）.生活状況と通信メディアの利用　水野博介・中村功・是永論・清原慶子　情報生活とメディア. 北樹出版, pp.80-114.
中村　功（2001a）.携帯電話と変容するネットワーク　川上善郎（編）　情報行動の社会心理学　北大路書房 pp.76-87.
中村　功（2001b）通信メディア　東京大学社会情報研究所（編）日本人の情報行動2000　東京大学出版会　pp.126-139.
中村　功（2001c）.携帯メールの人間関係　東京大学社会情報研究所（編）日本人の情報行動2000　東京大学出版会　pp.271-303.
中村　功（2003）.携帯メールと孤独. 松山大学論集, 14（6）http://www.soc.toyo.ac.jp/media/faculty/ nakamura/kodoku.htm.
中西新太郎（2000）.青少年の行動文化とケータイ・メール　月刊生徒指導, 9月号, 2-15.
Neuman, W. R. (1991).*The future of mass audience*. Cambridge, NY: Cambridge University Press.
西田司・グディカンスト, W. B.（2002）.異文化間コミュニケーション入門：日米間の相互理解のために　丸善
岡田朋之・松田美佐・羽渕一代（2000）移動電話利用におけるメディア特性と対人関係－大学生を対象とした調査事例より－　情報通信学会年報, 15, 43-60.
岡田朋之・松田美佐（編）（2002）.ケータイ学入門　有斐閣
Palmgreen, P. (1984).Uses and gratifications: A theoretical perspective. *Communication Yearbook*, 8. Beverly Hills, CA: Sage, 20-55.
Rubin, A. M. (1981).An examination of television viewing motivations. *Communication Research, 8 (2)*, 141-165.
Rubin, A. M. (1984).Ritualized and instrumental television viewing. *Journal of Commnication*, 34(3), 67-77.
Rubin, A.M. and Perse, E. M. (1987a).Audience activity and television news gratifications. *Commnication Research, 14(2)*, 58-84.
Rubin, A.M. and Perse, E. M. (1987b).Audience activity and soap opera involvement a uses and effects investigation. *Human Communication Research, 14, (2)*, 246-268.
Rubin, A. M. and Rubin, R. B. (1982) Contextual age and television use. *Human Communication Research*, 8, pp.228-244.
ソレンティノ, R. M.・ロニー, C. J. R.（2003）.（安永悟・大坪靖直・甲原定房訳）未知なるものに揺れる心－不確実志向性理論からみた個人差　北大路書房
竹内郁郎（1967）マス・コミュニケーションの機能. 今日の社会心理学4 社会的コミュニケーション　培風館　pp.389-530.
辻　大介（1999）.若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア. 橋元良明・船津衛（編）子ども・青少年とコミュニケーション　北樹出版　pp.11-27
辻　大介・三上俊治（2001）.大学生における携帯メール利用と友人関係　大学生アンケート調査の結果から　第18回情報通信学会大会 2001（平成13）年6月17日 個人研究発表配付資料 http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp / ~tsujidai/paper/ r02/index.htm
東京大学社会情報研究所（2001）.日本人の情報行動2000　東京大学出版会
富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦（1997）.ポケベル・ケータイ主義！　ジャストシステム
Wright, C. R. (1964) .Functional analysis and mass communication. In Dexter L. A. and White, D. M. (Eds.), *People, society, and mass communication* (pp.91-109) NY：Free Press of Glencoe.